



INAX MUSEUMS

INAXライブミュージアム

NEWS LETTER

vol. 04 季刊 夏
2007

特集

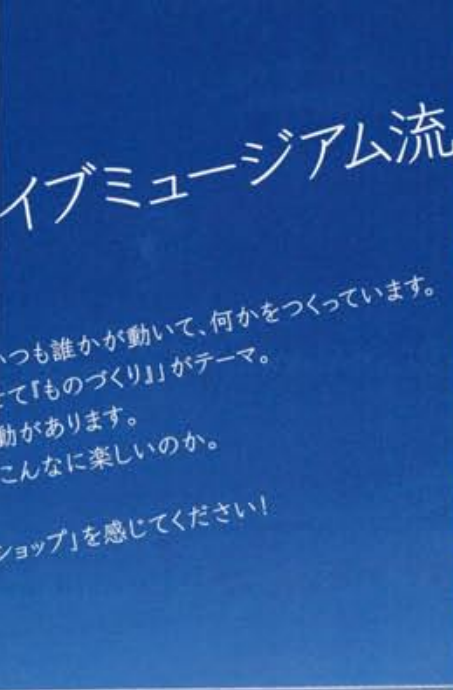
これが、INAXライブミュージアム流
ワークショップ!!



特集

これが、INAXライブミュージアム流ワークショップ!!

INAXライブミュージアムのなかでは、いつも誰かが動いて、何かをつくっています。ワークショップも、「みんなで力を合わせて「ものづくり」がテーマ。そこには、これまで経験しなかった感動があります。「ものづくり」のワークショップはなぜ、こんなに楽しいのか。フォトアルバムと座談会で「INAXライブミュージアム流のワークショップ」を感じてください!



【特集】これが、INAXライブミュージアム流ワークショップ!!

02 みんなで一緒に「ものづくり」すると、喜びが何倍にもなる。
座談会／伊藤幸子・酒井敏子・八木孝幸・辻孝二郎・磯村司

- フォトアルバム1 日干しれんがづくり ワークショップ
- フォトアルバム2 みんなでどろ遊び どろんこ広場で遊ぼう
- フォトアルバム3 竹でつくる憩いのベンチ ワークショップ
- フォトアルバム4 こんなワークショップも

LIVE REPORT

- 07 開催報告
- [企画展] 水と風と光のタイル—F.Lライトがつくった土のデザイン
 - [企画展 記念講演] 帝国ホテルの顔—大谷石とタイル 谷川正己
 - [企画展] やきもの新感覚シリーズ 第63回～第65回

LIVE SCHEDULE

08 これからの催し

CONTENTS

NEWS LETTER

vol.04 季刊夏 2007

表紙写真
どろんこ広場に出現した小さなどろ田。やきもの用の土の感触は、ひんやり気持ちよくて、みんなどろ遊びに夢中です。子どもも大人も、笑顔あふれる一日でした。(2007.5.3)

表紙撮影：加藤弘一

常滑から

黒の町・常滑の赤い屋根



やきものの町・常滑には、かつて多くの煙突が林立し、そこから吐き出される大量の煤が町を覆いました。煤による汚れや腐食を防ぐため、常滑の家では壁面にコールタールを塗装したそうです。今でも、黒べんキで板壁を塗る旧家も多く、屋根に乗っている黒い「いぶし瓦」ともに、常滑の町の色合いをつくり上げ、「黒の町・常滑」と呼ばれることもあるそうです。

そんな常滑の町外れに、赤い瓦の屋根を見つけた。昭和の中期から後期にかけてつくり、モダンな瓦として人気があったもので、素焼の後に行う「いぶす」という工程の代わりに、赤い素地の上に透明の釉薬を施して耐水性を向上させた瓦でした。当時画期的な効率化をもたらしたと聞きます。

昔も今も効率化を追い求める窯業技術者たちの心意気を感じさせるものです。

後藤泰男
（ものづくり推進スタッフ）

※ INAXが生まれ育った常滑のやきものや土に関わる人、風景、できごとなどを、INAXライブミュージアムのスタッフが伝えます。

(2007/5.3~5)



「入ってもいいんだよ」。ボランティアスタッフの呼びかけに、恐る恐るどろん田の中に入る子。入ってしまえば、一瞬で、ここが楽しい場所だとわかる。



ただ土と戯れ、納得するまで遊ぶ。あえて言うなら、五感を開くワークショップ。生活のなかで少し遠くなった「土」という存在。その魅力をまっすぐに伝えていきたい。



この時ばかりは、「泥だらけ」になっても大丈夫。



足でくちくちゅ、手でべたべた。「ほら、見て、こんなになっちゃ」

(2006/5月・6月)



土を型に入れ、形が崩れないように取り出す。「もう、はずれるかな?」「もうちょっと!」大人も子どもも真剣です。



日干して固まったれんがの表面を削って表情をつける。手と同じく口もよく動いて、楽しい時間をともに。



参加者約220名、6日間わたるワークショップで3000個の日干しれんがをつくり上げた。自分がつくったれんがが壁になり、建物とともに長い年月を生き抜く。そんな、ものづくりの体験を大切にしたい。

みんなと一緒に「ものづくり」すると、喜びが何倍にもなる。

座談会

INAXライブミュージアムのワークショップを体験した参加者とスタッフが、思い思いに語ります。

- 伊藤幸子さん (「みんなでどろ遊び」ボランティアスタッフ)
- 八木孝幸さん (「日干しれんがづくり」ボランティアスタッフ)
- 辻孝二郎 (INAXライブミュージアム館長)
- 酒井敏子さん (ワークショップ参加者、「みんなでどろ遊び」ボランティアスタッフ)
- 磯村 司 (陶業工務工務長、土・どろんこ館ワークショップ担当)



伊藤幸子さん
Sachiko Ito

「ずっと工事中の小屋なんかがあると嬉しいです。来るたびに違う仕事を見たり、参加したり。つくる過程が魅力的だと思うので。」

伊藤 私は「どろん遊び」のボランティアをしました。「土・どろんこ館」がオープンした時に、「いつかはどろん田をつくる」と聞いたので、「どろんこ遊びがしたい」と待ちかまえていました。でも「遊べるのは小学生まで」とあって、「親のフリは難しいし…」なんて思っていたら、ボランティアのお話が、「シメシメ」と。

どろん田は本当に気持ち良く、やきものの土の泥だったのでまた違う感触。子どもたちに遊んでもらいながら、遊んでいました(笑)。

辻 どろんこ遊びのできる「土・どろんこ館」をめざしていました。「土に触れる」という原点を体験してもらいたいから。でも、子どもの

ワークショップは常に進行形

左官職人の久住有生さんが講師をしてくださいましたが、彼らは人を飽きさせず、楽しませながら進めていくことが、すごく上手だった。要所に見せ場みたいなのがあって。火を使ってくれんがを炙ったときには、子どもたちが興奮しちゃってね(笑)。

酒井 私の場合、「日干しれんがづくり」のワークショップは「ただもう、楽しい!!」っていう感じ。土や泥なんて、普段は全く触らないでしょ。それを、大人がみんな汚い格好して集合して、ベタベタになりながら遊んでいる。「楽しい」と見つけたぞー(笑)。

て、できた建物を見たら、また感動!自分のつくったものが建物の一部になって、そして景色になっているって素晴らしい。



八木孝幸さん
Takayuki Yagi

「ワークショップの楽しさって、たぶん伝染していくんです。人が楽しいのが自分に伝わってきて、心の中が嬉しくなる。」

辻 また、「みんなて内壁に使う「日干しれんが」をつくらう」と、最初のワークショップをすることに。八木さんの友人グループです。八木 ぼくはボランティアスタッフとして参加したんですが、得たことがたくさんあります。「土・どろんこ館」の設計者の日置拓人さんとかなと思いました。

八木 「土・どろんこ館」の壁は、土で、しかも「版築」という工法でつくると、実際に身長よりずっと大きい壁をつくって見せてくれたんです。「これはいいものだ。すごいな」と、すごく伝わってきた。僕も参加してみようかなと思いました。

「土・どろんこ館」の建物をつくるのも「ものづくり」です。そこで、地元の人たちも参加して、みんなでつくっていくことを考えました。工期や安全性の問題などがあって、できることは限られていたんですが、建設が始まる前に、八木さんや多くの常滑の方と「土の建築」を議論する場を設けました。

「土・どろんこ館」の壁は、土で、しかも「版築」という工法でつくると、実際に身長よりずっと大きい壁をつくって見せてくれたんです。「これはいいものだ。すごいな」と、すごく伝わってきた。僕も参加してみようかなと思いました。

※版築…仏教建築とともに中国から伝来した工法。板枠の間に土を詰めて、上から突き固める。

(2007/4.30)



作業の後、みんなで食べるとおいしいね。始まりのときは違う、くつろいだ雰囲気。



もうすぐお昼。スタッフが楽しそうにつけているのは、お肉のたくさん入ったカレーです。



座面の竹を縛っていきます。だいぶ慣れた手つきになってきました。



紐の結び方講習を受けた後、16名が4つの班に分かれてそれぞれ1つつ竹のベンチをつくる。涼しげなベンチができあがる頃には、初めて出会った者同士が友人に。それがワークショップの醍醐味。



さて、午後は仕上げの作業。ガンバロウ!



みんなと同じデザインじゃいやだから、オリジナルのデザインに。



「土台がしっかりしていないとね」「アレ?巻結びってどうやるんだっけ」



「こうして縛るんだよー」「ホー!」



グループに分かれて、竹を運んで適当な長さに切ります。



本結び、一重結び、巻結び、八の字結び…。まずは、いろいろな結び方の講習から。「新聞縛るときとか、役に立ちそうね」



よくしゃべり、よく笑いました。3mの竹でつくるいちばん大きなベンチを担当。「楽しかったー」



「縛り方がゆるすぎるからやり直し」の指示も、笑顔で乗り切りました。「年の違う人と話せて嬉しかった!」



じっくり、確実に、丈夫なベンチをつくりました。「水で濡らすとちょっと締まるよ」など、情報交換しながらの作業。



監督さんの指揮のもと、若者が教わりながらという感じ。最後の頃は、自信を持った縛り方だったのが印象的。



磯村 司
Tsukasa Isomura

「宿泊を伴ったワークショップをやってみよう。もっと長い時間、参加者と楽しめる時間を設けたいから。食も睡眠も、ワークショップには大切なことです。」

伊藤 私もそうですけど、楽しいワークショップって、ファンをつくっていきますよね。

みんなで知恵を出し合うから楽しいんだ

磯村 最初は講師に教えてもらったのと全く違う結び方してたよね(笑)。ベンチができ上がった後、みんなで座っていると、やっぱり解けてくるの、タマネギ結び。秘かに補修して(笑)。その縄の結び目に、気持ちがいもついている。それを見ると、彼らを出す。再会の約束をしておかなかったのが心残りです(笑)。

磯村 自分のつくったものには、愛着がわきますよね。「壊れかけたら修理するから呼んで」という人や、ゴルフデンウィーク中にベンチの点検に来た人もいます。

それはタマネギを束ねる時の縛り方で。磯村 最初に講師に教えてもらったのと全く違う結び方してたよね(笑)。



酒井敬子さん
Toshiko Sakai

「大人のワークショップがしたいな、INAXのタイムズ職人のワークショップとか。どろんこ博士と話してみたい。」

磯村 4チーム、それぞれが個性的でした。酒井 タマネギ農家の方は竹を縛って縛る時に「そんなじゃだめだ、こう」と指導してくれた。最初は、「この4人で一番大きい竹をつくるぞー!」ってことで、ちょっと団結。そして作り始める。と、ほんの数分で、「会うべくして会った」みたいな感じになりました。

磯村 「日干しれんがづくり」で「土どろんこ館」大好き!と思ったので、「竹でつくるベンチ」にも参加しました。ワークショップって職業や年齢の違う人が集まる。だから、楽しい。

酒井 私も「どろ遊び」に参加しました。伊藤さんと全く同じ、「遊ぶぞー!」という感じ。私がどろん田に入っていると、お母さんも靴を脱いで入ろうとするので、「大人はだめです」と言ったりして(笑)。大人も遊びたいんです。INAXライブミュージアムのワークショップは常に進行形です。「どろ遊び」もまだまだ変わっていきます。大人も楽しくて、なおかつ子どもも楽しい。それがめざすところです。「会うべくして会った仲間になる」



牧神の笛パンフルート
制作体験&コンサート
(2007/2.12)

素朴な音色が魅力のパンフルートを
奏者・大東晋さんの指導でつくり、
みんなで合奏も楽しんだ。

大東晋さんの指導で、1オクターブ以上(10本の)
パンフルートをシノ竹で制作。



できあがったらみんなで、合奏。
これが楽しい!

音を確かめながら、
シノ竹をしっかりと削いでいく。



「光るどろだんごづくり」教室

「土・どろんこ館」定番の体験教室。
子どもを連れてきたお父さんが
夢中になってしまうというから、
どろだんごづくりは奥が深い。

INAXライブミュージアムのオリジナルのつくり方で、
光るどろだんごづくりに挑戦。



大人も子どもも、磨け、磨け

色土を薄く塗りのびして、
だんごのタネを「のこ飯」で
いよいよ最終工程の「磨き」へ。きれいな球体に。



辻 孝二郎
Kojiro Tsuji

「細かく分業化されたものづくりの時代、全プロセスを共有して、全体にかかわってものをつくる。素朴なものづくりで、とても貴重な経験です。」

磯村 確かにリピーターは多いなと感じます。先日、「光るどろだんごづくり」の7回目の予約をしていかれた方がいます。彼女は、どろだんごという「物」をつくりに来るんじゃないんですね。「ここの空気がいい」って言ってくれます。

辻 そういう人に企画の段階から参加してもらって、「光るどろだんごづくり」も次のステップを考えたいですね。ワークショップというのは、決められたことをその通りやるんじゃないって、みんなて知恵を出し合いながら進んでいくのが楽しいんですから。

酒井 ずっと疑問に思っていたこと、聞いていますか? INAXという民間企業が、こういう施設にお金を投資するのはなぜですか? 辻 INAXには「企業は文化機関である」という考えがあるんですね。経済機関だけではないとの考え方です。この点が他企業と異なり、非常に個性的だと思います。背景としてINAXのスタートはやきものを基本とした生活文化に根ざす商品をつくってきた企業であったということもあるかもしれません。

当ミュージアムもその流れにあります。何かと一緒にくるというのは、人と人との距離を非常に縮めます。「ものづくり」を通して、仲間ができる、豊かな気持ちになる、喜びを共有する。INAXライブミュージアムのワークショップは、そうありたいと思いますね。

(5月26日収録)